

高校生のパフォーマンス(身体表現)活動による学校適応への影響

—広域通信制K高校の3年間の質的縦断調査の自己評価に着目して—

大橋 節子 (甲南女子大学大学院人文科学総合研究科) 金子 恵美子 (埼玉純真短期大学こども学科講師)

要約

義務教育修了後、高校に進学した生徒の不登校や中途退学が増加する中、高校における生徒の学校適応を支援することは重要であると思われる。本研究では、近年、不登校経験のある生徒の受け皿にもなり、不登校再発や中途退学予防の取組みに一定の成果をあげている広域通信制 K 高校に着目した。K 高校には生徒の関心に合わせたさまざまな教育を行うコースが設けられている。なかでも3年間パフォーマンス(身体表現)活動を行うコースに在籍する生徒の学校適応(本研究では出席率を指標とした)が高いことに着目し、パフォーマンス活動が生徒の学校適応や自己評価とどのように関連しているのかについて質的縦断調査により検討した。

キーワード: 不登校、パフォーマンス活動、学校適応、自己評価、質的縦断調査

1. 問題と研究目的

2013年、不登校の小中学生は6年ぶりに前年度より7,000人増加し、119,617人となった。また、高校における不登校生徒は55,655人で前年度より2,009人減少したが、中途退学者の総数は59,923人となり前年度の8,142人増しとなった(文部科学省、2014)。

1980年代後半からの不登校児童生徒数の増加は、我が国の教育のあり方について問題を投げかけただけでなく、以降、不登校問題は深刻な教育課題であり続けている。この間、「学校原因」、「家庭原因」、「本人原因」と不登校に至った原因追及が様々な形で行われてきたが、近年は不登校原因の「多様化」「複合化」が進んだとされ(伊藤、2009)、不登校問題の解決や不登校児童生徒数減少の目途がたつたとは言いがたい。また、古荘(2009)は、こども版 QOL 調査の結果、日本の子どもは他国と比べ自分に自信がなく、自分や学校への満足度が低いこと、特に自尊感情が低く、そのことが逆境に打ち勝てない、居場所喪失の不安、学力低下、いじめ自殺企画などの教育病理現象と関連していることを指摘している。また、伊藤ら(2013)は、不登校児童生徒の自尊感情の低さを実証している。このような特徴も、不登校児童生徒の問題解決への取り組みを困難にしていると考えられる。さらに、義務教育以降の高校生の不登校や中退の問題は、大学進学後の不登校や中退、ひいてはひきこもりにつながるとされ、社会的問題にもなっている(内閣府、2011)。

このように不登校や中退問題に対する改善策や適切な方法が示されない中で、筆者らは従来の「原因追究型」ではない不登校へのアプローチとして、パフォーマンス(身

体表現)活動の導入と学校適応に関連があるのではないかと仮説をたてた。そこで、学校適応の指標を出席率とし、パフォーマンスコースの学校適応を検討した(大橋ら、2014)。パフォーマンスコース(以下、パフォ)と対照群である総合進学コース(以下、総進)との平均出席率を比較した結果、1年生の時は総進79.6%、パフォ83.9%、2年生の時は総進80.6%、パフォ83.9%で差が見られず、3年生の時には総進82.3%、パフォ89.0%で有意な差が見られ($t=4.67$, $df=85$, $p<.01$)、パフォの方が総進よりも学校適応が進んでいるという結果となった。そこで、パフォに在籍する生徒に注目し、パフォーマンス(身体表現)活動を積極的に行うことが生徒の心身の成長をどのように促し、自己評価にどのような影響を及ぼすのか、そして学校適応にどのように関連しているのかについて、高校3年間を通して半構造化面接法による質的縦断調査を行い、その影響を検討した。

2. 研究方法

1) 調査対象・調査時期

2012年度に入学したK高校のパフォに在籍する生徒を対象に、3回の面接調査を行った。調査対象時期は、1年生(2012年5月、25名)、2年生(2013年8月、33名)、3年生(2015年2月、18名)である。各回で調査人数が異なるのは、芸能活動のためほとんど参加していなかった生徒が参加するようになった、出欠状況が不安定であった生徒が安定して登校するようになることで人数が増加したり、逆に思ったように練習についていけない、将来の目標が変わった、コースに入学した目的をすでに達成した

などの理由で他コースへ移る生徒がいるためである。

K 高校は、不登校経験のある生徒が約 6 割を占める広域制通信高校であるが、全日制高校と同じく、毎日通学することを基本としている。今回の調査対象であるパフォは、K 高校の東京キャンパスで開講されており、高校 1 年～3 年生、約 100 名が通常の授業と共にパフォーマンス活動を行っている。パフォーマンス活動とは、ダンス、歌、芝居、ラップ、インプロ、殺陣、戯曲執筆など多様な内容を授業で学びながら、それを基礎として、年 2 回の劇場を使った本格的な公演（芝居）と、地域行事や施設訪問等でのボランティアでのパフォーマンス披露（歌、ダンス、ミュージカル、芝居など）を行うものである。公演やパフォーマンス披露での配役は、オーディションに合格する必要があるが、また、オーディションに合格することができても、練習での状況によっては途中で交代となることもある。

2) 調査方法

調査は一人あたり 30 分間程度の個人面接を K 高校の教室を使用して筆者ら 2 名で行った。パフォーマンス活動による自分自身の成長、人間関係、カリキュラム、今後の目標・展望についての自己評価の変化を確認するため半構造化面接法を用いて面接を実施した。

3) 調査内容

調査内容は、1. 自分自身の成長の変化（①1 年間を通しての成長・変化②過去の自分との違い③学校生活や自分自身の変化）、2. 人間関係（①先生②同期③先輩④後輩）、3. カリキュラム（①入学理由と活動経験②好きなカリキュラム内容③筋トレなどの身体活動（運動）による変化④好きなコース行事⑤公演での役柄・役割（スーパーメイン、メイン、アンサンブル、裏方^注）、4. 今後の展望・目標について質問した。

4) 分析方法

3 回の面接でのプロトコルを分析し、筆者ら 2 名で協議を経て、発言内容を小カテゴリーに分類し、さらにそれらを大カテゴリーにまとめた。カテゴリーに分類するにあたっては、KJ 法の分類を参考にし、各回の語りについて、面接での調査内容である「1.自分自身の変化」「2.人間関係」「3.カリキュラム」「4. 今後の展望・目標」ごとにまず語られた内容を整理し、類似している語りを集めて小カテゴリーとし、その内容を代表するカテゴリー名を付けた。命名した小カテゴリーについて、さらに共通点が見出せるものをまとめて大カテゴリーとし、その共通点を大カテゴリー名とした。

5) 倫理的配慮

パフォ担当教諭が事前に調査目的、面接方法、内容を保護者・生徒に説明し、同意が得られた生徒に面接を行い、その際には、①所要時間、②任意であること、③高校生活に不利益が生じないこと、④インタビュー途中で中止で

きること、⑤音声記録を取ること、⑥音声記録は研究者以外の眼に触れることがないこと、⑦音声記録データの保管は鍵のかかる保管庫で行い、研究が終了した後は、データは消去し記録はシュレッダーにかけるなど適切な処分を行うこと、を説明の上、同意書への署名を依頼した。

3. 結果

3-1 発話のプロトコル分析

面接により得た発話のプロトコル分析を行い、筆者ら 2 名で協議の上分類した結果、各時期に得られたカテゴリーは次のとおりであった。＜1 年生＞は入学して約 1 ヶ月後の時期で、「新鮮な楽しさ」、「自分を出せる・明るくなった」、「漠然とした展望・迷い」の 3 つのカテゴリーが得られた。＜2 年生＞は大きな舞台公演等、1 年間の活動を一通り経験したあとの時期で、「演技の楽しさ」、「自分を出せる・明るくなった」、「自信がつく」、「経験に基づいた展望」の 4 つのカテゴリーが得られた。＜3 年生＞は最終学年としての活動を終えた時期であり、自分自身の成長について、より多くのエピソードが語られた。パフォーマンス活動そのものに対する発話が増え、演じることについてその楽しさだけではなく、演じることの困難や演じることによる変化に関する「達成感」「課題に取り組む困難」「新しい自分への変化」という 3 つのカテゴリーが加わった。また、1、2 年生のときの「自分を出せる・明るくなった」「自信がつく」といった変化から、さらに様々な経験に裏付けられた自信であると考えられる「課題を越える経験」「経験による自信」という新たなカテゴリーも見出された。この時期には卒業後の進路や目標も明確になることから、将来の展望についても「考えの明確化」「経験による現実的目標」というカテゴリーが得られた。さらに、以前に比べ人間関係の広がりや語られ、「最高学年の責任感」「先生への信頼」「コースメンバーの存在」「家族の支え」のカテゴリーが得られた。また 3 年生では表現に関する語りが増し「表現活動の良さ」という新たなカテゴリー分類ができ、その結果、3 年

表 1 2012 年～2015 年面接時の自己評価の変化

	大カテゴリー	カテゴリー
1 年生	演じること	新鮮な楽しさ
	自尊感情	自分を出せる・明るくなった
	将来展望	漠然とした展望・迷い
2 年生	演じること	演技の楽しさ
	自尊感情	自分を出せる・明るくなった 自信がつく
	将来展望	経験に基づいた展望
3 年生	演じること	達成感 課題に取り組む困難 新しい自分への変化
	自尊感情	課題を越える経験 経験による自信
	将来展望	考えの明確化 経験による現実的目標
	人間関係	最高学年の責任感
		先生への信頼
		コースメンバーの存在 家族の支え
	創作活動	表現活動の良さ

生では12のカテゴリーが得られた。大カテゴリーについては、1年生から3年生までに共通したカテゴリーとして、パフォーマンス活動から得た自己評価をまとめた「演じること」、日常生活の中で自分を出せることや自信に関するものをまとめた「自尊感情」、将来の進路や目標をまとめた「将来展望」という3つが見出された。そして、3年生では、それら3つの大カテゴリーに加え、人間関係に関する自己評価をまとめた「人間関係」、表現活動に対する興味や関心をまとめた「創作活動」の2つの大カテゴリーを加え、5つの大カテゴリーが見出された(表1)。

3-2 学年進行にともなう自己評価の変化

3-2-1 「演じること」に関する変化

1年生では、パフォーマンス活動における稽古内容がほぼ「初めての経験」と語られ、「新鮮で全部楽しい」と活動の満足感が語られた。2年生では、演じることの語りが増え「演技が大好き。セリフは一行だがいろんな感じ方があり、いろんな人になれ楽しい」と役を演じる楽しみが語られた。3年生、最終公演終了後のインタビューでは、「表現ができない環境・時期は苦痛。本当に表現が好きと実感した」など表現活動が楽しいという気持ちに至るまでの苦しさから達成感へと変化する様子を聴き取ることができた。「課題に取り組む困難」では、課題解決に立ち向かう姿勢が語られた。「新しい自分への変化」では、「初めて気持ちが“落ちた”ⁱⁱⁱ、背負っていたものが全部外れ“落ちる”という気持ちに気づいた」という“落ちる”経験から気づきがあったことが語られた。“落ちる”と表現された葛藤経験は、1年生の時には楽しく活動できることで充実感を得られていたものが、経験を積み重ねてきたことで次の目標を見出すことや先輩として振舞うこと、失敗も受けとめていくことなどが要求されるようになり、それらに十分に対応できないことで生じ、モチベーションの低下につながっていく可能性があることが推測された。しかし、先生からの働きかけや同期・後輩への責任感が支えとなったり、公演の作品変更などの出来事がきっかけとなり、モチベーションの回復へと進んでいた。そして、葛藤を経験することにより、人間関係が深まるとともに、自分のことだけでなく他のメンバーやコース全体のことを考えるという視点や自主性を持つように変化している様子が見られた。公演を作る過程で起きた様々な出来事を通し、コース全員で力を合せ、課題を乗り越える中で新しい自分の変化を発見したことが語られた。

3-2-2 「自尊感情」に関する変化

前述したように、日本の子ども達の自尊感情が低いとされ(古荘, 2009)、また不登校との関連についても指摘されている(伊藤ら, 2013)。そこで、本論ではパフォーマンス活動と自尊感情との関連に注目した。1年生では、不登校時の引込み思案が解消し良く話ができるようになった、また、周囲から表情が明るくなったと認められ「自分を出せる・明るくなった」と自信がついた様子が語られた。2年生では、

観客を前に舞台公演を披露できたことで、「中学校の頃は全然学校も行っておらず、ほとんど家から出なかった。1年間いろんな体験をし、他の人や物に興味を持ち、人に接する恐怖心がなくなってきた」と不登校経験からの回復が語られた。また観客を前に堂々と振る舞うことができ、自信がつき新たな挑戦に意欲を持ったという語りや、「レッスン、授業で機会を与えられ、ほめられダメ出し^{iv}され改善しうまくなり、最終的には輝けた。それが自信になった」とパフォーマンス活動で得た自信と成長についての語りも見られた。3年生には、困難な状況でも課題を越えられた経験から、「支えてくれたみんなを信じ、逃げる選択肢は考えなかった」、「常識を学び、コミュニケーション力がついた、将来に活かそう」と苦手なことや逃避してきた過去を振り返る語りが見られた。パフォーマンス活動を通して自分で課題が解決できた自信が過去の経験も乗り越え、自分自身が成長してきたことを実感している語りになったと考えられる。これは、現在の自尊感情が高いほど、過去の不登校経験をプラスの経験と捉えなおす傾向が強いことを指摘した伊藤ら(2013)の研究とも一致する結果であろう。「芝居を先生に認められたことが何よりも嬉しかった」、「中学校に行けなかったこと、行けなくてできなかったことを取り返すために高校では1つのことを貫こうと思った。3年間かけて達成できてよかった」と自分の活躍を実感しており、パフォでの成功体験が自尊感情にも影響したと考えられる。

3-2-3 「将来展望」に関する変化

1年生では、「世界を舞台に活躍できる女優になりたい」など漠然とした語りが多く、「漠然とした展望・迷い」というカテゴリーが得られた。2年生には、「舞台を見に来てくれた子どもたちの笑顔に、(保育士に)興味がわいた」と演じる経験から具体的な職業の展望が語られた。また、「演劇の仕事がしたい。3年生までメインをとり続けたい」とパフォーマンス活動が身近な将来展望となる語りもあった。3年生の将来展望では、「自分が悔いのないようにすごしたい。それを全体にどう反映させるか、後輩のためにどう動けばいいのか、すごく考えた」など後輩指導の重要性や後輩に対するアドバイスをどう残すべきかを真剣に考える語りが増した。また、「考えの明確化」というカテゴリーでは、「自分の意見や思い、今なすべきことがクリアになった」、「周りのことを考える人間でなかった。中学校へ行っておらず環境の変化も大変だった。3年間かけて変わり、今が一番自分を変えているものにつながっている」などの語りも見られた。将来に向けては、「どんな辛いことがあっても乗り越えて行ける自信がある。最高の仲間を持ち、3年間の経験を通し一人でこれからは立ち向かう」、「(3年生で)進路を迷ったとき、担任の先生の後押しがあった。(パフォで)辛いこともあったが、やり通したので自分の努力でどうにでもなるという確信をもてた」と1年生の時とは全く違う進路選択にも自信に満ちた展望を明確に語っている。

3-2-4 「人間関係」に関する変化

3年生では、「演じる上で役を作ることは大事だが、そこに意識し過ぎて表面上しか付き合っていなかった。今は人間と人間の深いかかわりになり、何も気にせずに全部さらけ出した」とメンバーとの人間関係が深まっていく様子が語られている。「3年生になって後輩への責任感を感じ、どうすればみんなが快適にすごせるコースをつくれるのか考えた年」、「まだ足りないが、後輩を引っ張っていける3年生になれた」と後輩との関係性とその責任の重さが語られた。また、先生との信頼関係が変化した語りも多く見られた。「先生にダメ出しをもらい、それは自分の責任であり、背負うべきことだったとわかった」と先生からの指導を前向きに受け止めている。また、「二人つきりになったとき先生が泣いた。申し訳なくて私も泣いた。ここまで打ち解けて言ってくれる先生を尊敬した」と先生との距離が接近したことなど3年間で関係性が深くなったという語りとなっている。さらに、「3年間で先生の愛を感じた。ウルサイすぐ怒る、「なんなんだ」と思っていた。今は怒られたいと思う」と、指導への評価が高まっている。「今まで3年間、何をしても見捨てないできてくれた。最後までどんな経験・形であってもついて行こうと思う」と、「見捨てられなかった」、「愛があった」、「近い関係」、「濃い関係」ということが繰り返し語られ、「先生はいつも奥深いところまで考えてくれた。その言葉一つひとつが私を救ってくれ、ここまで導いてくれた」、「おなじことを言われ続けてきたがそれぞれ違うとわかった。その言葉が今も自分に残っている」と先生の言葉の重みを理解したという語りが増えた。さらに、ここでは困難を克服できた大きな要素として「コースメンバーの存在」や「家族の存在」が挙げられた。「同期で3年間を共にし、全部話してこんなにいてくれる子がいるのに学校に行かないわけがない」、「母とは喧嘩いろいろあったが、どんなときも応援してくれ、優しく見守ってくれた」と自分をとりまく人々への感謝の語りが増した。パフォの生徒にとって先輩がいる、あるいは後輩ができるなど3年間の時間経過が重要であり、継続して活動するなかで人間関係が構築できた重要性が語られた。

3-2-5 「創作活動」に関する変化

表現・創作活動を掘り下げて語ったのは3年生が初めてで、「芝居・表現は人を救う。人に夢を与えられるものであり、自分の元気薬」、「365日芝居のことを考えている。私から表現をなくせば何もなくなる」など、これまでの創作活動への取り組みについて豊かな表現力で語っていた。今後も創作活動を続けるという語りや今すぐ関わられなくても進学先で何らかの活動を続けたいという語りが見られた。

4. 考察

1、2年生と3年生の語りを比較すると、語りから分類されるカテゴリーの種類が増え、パフォーマンス活動の経験を

通して生徒の自己評価に変化が生じていることが推測された。自尊感情や将来への展望に変化が生じているだけでなく、内在する思いを表現する力にも顕著な変化があったともいえる。面接の語りでは、ただ単に語彙力が増えただけでなく、思いを伝える際の表情の変化や表現力にも変化が見られ、そうした変化も自己評価の変化と関連していると考えられる。自己評価の変化は、3年間の中でも特に3年生での変化が大きいと考えられ、その背景には3年生だからこそ経験する「大変さ」があると考えられる。3年生へのインタビューで「大変さ」として語られた内容は、演目やキャスト変更への対応、同期の脱落、自分自身への課題の重さであった。また「成長の支え」となったのは、最高学年であること、先生からの信頼、同期との信頼関係、後輩の存在、舞台での役割、自分らしさであった。様々な困難を抱えながらも、「成長の支え」によって「大変さ」を乗り越えた自信が生徒の自己評価を変化させ、さらに他人に感動を与え、笑顔にできた経験が生徒の自尊感情に良い変化をもたらしたと考えられる。パフォーマンス活動を通して1つの舞台を作り上げていく中で、困難とそれを乗り越える経験を繰り返し、目標を達成できた自信が自尊感情を高め、それがパフォの学校適応につながっているものと推測される(図1)。

「生きる力」は、確かな学力、豊かな心、健やかな体の知徳・体のバランスのとれた力であり、変化の激しい社会を生きるためにこれら3つの力をバランス良く育てることが大切であることが学習指導要領でも示され、日々の教育の中で育むことが重視されている(文部科学省、2011)。それら3つの力の中でも、特に「豊かな心」は「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する力などの豊かな人間性」(文部科学省、2011)と定義されているが、日々の教育活動の中で、他人とともに協調し、思いやる心をどのように育てていくのか、また心が動く感動をどのように創りだし、感動する力を育てていくのかについて具体例は示されていない。平田(2012)は、最近の子ども達に欠けると言われるコミュニケーション教育には体験活動が重要であるとし、他者を演じる演劇が疑似体験としてのコミュニケーションの場となりうる可能性を指摘している。これまで自分を表現することが少なかった生徒や苦手だった生徒にとっては、役を通したコミュニケーションは生身の自分としてコミュニケーションする困難を和らげ、コミュニケーションを十分に体験する機会になり、その結果、1年生、2年生の「自分を出せる・明るくなった」という変化につながっているものと考えられる。また、パフォでの活動は、全員で協力して公演の舞台を作り上げていく取り組みでもある。生徒が「演じることで一つのものを作り上げることが重要。舞台を全体で作ることが重要」と語ったように、他者とともに協調し1つのものを作り上げていくという活動が、他者を意識し、互いを支え合う体験となり、3年生に「コースメンバーの存在」の重要性が語られるという変化につながったものと思われる。演劇という形で「仲間とともに「役を生き

る」という活動を体験する中で、人と繋がる方法を体得し、表現できるほどにことばをコミュニケーションの道具として使いこなすことができるようになったのではないだろうか。また、竹内（2003）は、役を演じることが「共同の創造の営み」となったとき「生きる力」がめざめる」と述べている。パフォーマンスを行うとき、生徒は演じる役の置かれた状況や気持ちを真剣に考え、主体的に役に取り組み創造していく。そして、3年生で「先生への信頼」「コースメンバーの存在」「家族の支え」が語られたように、生徒が主体的に創造していく作業を教員、他のメンバー、家族が支えるとき、それが「共同の創造の営み」となり、他者との協同作業により舞台という1つのものを作り上げた感動が「生きる力」の1つである「豊かな心」をはぐくむことにつながっているのではないだろうか。

竹内（2003）は、「からだ」の目覚めはまさに「たましい」の目覚めであり、魂は「からだ」として目覚めていく」と述べている。生徒が体験したパフォーマンスは、まさに身体表現活動を通して「からだ」が目覚め、自分自身の「魂」に出会う経験であり、その経験の中で葛藤し、困難を乗り越えていくことが自己を見つめ、他者と出会い、繋がるという経験になったものと思われる。不登校経験のあるなしにかかわらず、生徒はそうした経験を通してさまざまな面での自己評価を変化させ、自尊感情を高め、将来展望を明確にしていき、そのことが学校適応にもつながったものと考えられる。

〈引用文献〉

古荘純一, 2009, 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのかー児童精神科医の現場報告ー, 光文社新書
 平田オリザ, 2012, わかりあえないことからーコミュニケーション能力とは何かー, 講談社現新書
 伊藤美奈子, 2009, 不登校 その心もようと支援の実践, 金子書房
 伊藤美奈子・小澤昌之・安田崇子・星野千恵子・福智直美・近兼路子・原聡・鶴岡舞, 2013, 不登校経験者の不登校をめぐる意識とその前後との関連ー通信制高校に通う生徒を対象とした調査からー, 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要, pp. 17-27
 文部科学省, 2011, 現行学校指導要領・生きる力
 文部科学省, 2014, 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査
 内閣府, 2011, 若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）
 大橋節子・金子恵美子・伊藤美奈子, 2014, 不登校経験のある高校生の学校適応とパフォーマンス活動の関連についてー通信制 K 高校の実践からー, 日本教育心理学会ポスター発表
 竹内敏晴, 2003, からだ=魂のドラマー-生きる力がめざめるために-, 藤原書店

- i 高校1年～3年生まで総勢100名程度が在籍。ダンス、歌、芝居、ラップ、インプロ、殺陣、戯曲執筆が授業に組み込まれ、劇場を使つての本格的な公演、地域の行事や施設の訪問等のボランティア活動など公開の場での活動を行う。
- ii 主役、準主役などメインの役を支え、群舞等を行うキャスト、大道具・小道具、音響など。
- iii なんらかの葛藤を感じ、パフォーマンス活動のモチベーションが低下したり、期待に応えられない罪悪感を感じる状態。
- iv 舞台等を作っていく過程において、先生からパフォーマンスやパフォーマンスに向かう姿勢について行われる指導。

図1 パフォーマンス活動を行う生徒の自己評価の3年間の変化

